

東京家政学院 大家政 井上和子 ○田中弘美

元山梨大教育 矢崎浄子 共立女大家政 小林茂雄

目的：衣生活に対する価値観の多様化は下着の着用行動にも顕著に現れ、特に若年層の間では着方の多様化とともにランジェリーなどの省略化の傾向がみられる。本報では、女子大学生とその母親を対象に、下着の実用実態を調査することにより、世代による下着の着用行動の特徴について考察した。

調査方法：女子大学生200名、母親166名を対象に、下着の着用実態についてアンケート調査を行った。すなわち、ブラジャー類、ガードル類、ランジェリー類、ショーツ、シャツの絵表示を用いて、着用場面（街着、フォーマル、家庭、就寝）季節（春・秋、夏、冬）の面から着用実態を調査した。また、着用しない場合にはその理由についても調査した。なお、調査は1989年10～11月に行った。

結果：調査データはクロス集計のカイ二乗検定、及び分散分析による検定をもとに、女子大学生と母親の特徴を分析した。ガードルとランジェリーについては、どの季節においても着用場面の着用率において、女子大学生と母親との間に有意な差が明確にみられる。街着やフォーマル時でも着用に差がみられるが、特に家庭では女子大学生は「窮屈」「自然のままがよい」「何となく」という理由で着用せず大きな差がみられる。母親は、補正、整容、保温などの効果のあるロングガードル、ボディースーツ、シャツなど被覆部の大きい下着を着用しているのに対して、女子大学生は、柔らかく小さく軽いビキニタイプのショーツやソフトガードルなどをT.P.Oによって多様に着分けており、下着の軽装化が進んでいる。